音楽科と道徳が相互に効果を高め合う授業の一試論（1）

― 音楽科と道徳の独自性を生かした関連をめざして ―

河村仁美*・高橋雅子

A study of the classes with interaction between music and moral education (1)
― To make up the connection between music and moral based on those originality ―

KAWAMURA Hitomi and TAKAHASHI Masako

(Received September 30, 2011)

はじめに

近年、「心の教育」や「道徳教育の充実」などが叫ばれ、知識理解だけでなく児童の内面や感性の育成が重要な課題となっている。児童の内面や感性の育成は、学校における教育活動全体を通して行われるが、その中でも、豊かな情操や道徳性を養っていく音楽科や道徳のもつ役割は特に大きいと思われる。

音楽科では、音や音楽によって情緒的に心を揺さぶられることを通して、感性を育み、豊かな情操を養っていく。道徳では、日々の生活における様々なかかわりを通して、人間としてよりよく生きるための基礎となる道徳性を育成する。そこで、各々の独自性を生かしながら音楽科と道徳を関連させることで、内面や感性への働きかけが強まり、互いに効果を高め合うことができるという仮説を立て、研究を進めていきたい。

1　音楽科と道徳の関連の意義

ここでは、音楽科と道徳の共通点や関連と「かかわり」について述べた上で、音楽科から見た道徳との関連について論じていく。

1－1　音楽科と道徳の共通点

音楽科と道徳の共通点として、次の２点が挙げられる。

①　体験を通して心を揺さぶられる学習や活動

音楽科では、児童が自らさまざまな音楽活動を体験し、それを通して感動する心などの豊かな心を育てていくことをめざしている。また道徳においても、自らの体験や共感によってさまざまな道徳的価値を学んでいく必要があろう。

音楽科や道徳は、児童の体験や共感を通して心を揺さぶられることで、それぞれの目標が達成されていく学習や活動であると言えよう。

②　情操教育

音楽科は、豊かな情操を養うことを最終的な目標としており、音楽を通して心を育てる教育である。道徳教育は、言うまでもなく豊かな心を育む心の教育の基盤となるものであり、人格

*山口県周南市立富田東小学校

の形成にかかわるものである。豊かな人間性の育成をめざす学校教育の中でも、特に、音楽科と道徳は情操教育という側面が強いことが言えよう。

１－２　音楽科と道徳の関連と「かかわり」

まず、『学習指導要領』における音楽科と道徳の関連について見ていきたい。平成20年の『学習指導要領』では、道徳教育の充実が叫ばれ、音楽科をはじめ各教科等における道徳教育について意識して道徳の時間との関連を考慮することが明記されている。これは、道徳の時間と音楽科を含めた各教科等との指導において相乗効果を生み出すようにすることが大切であり、大きく期待されていると言えよう。

次に、実際の授業における関連について考える。一般的に音楽科では、音楽そのもののもつ美しさやよさなどを感じ取りながら表現や鑑賞の活動に取り組む。その際、音楽的な感受が大きな役割を担い、児童は教材をはじめ、さまざまな音や音楽に対して「情緒的なかかわり」をもつであろう。

一方、道徳の時間においては、自分自身や他の人とのかかわり、自然や崇高なものとのかかわり、集団や社会とのかかわりといった「自分とのかかわり」を深めながら、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳性を養っていくであろう。

このように、音楽科や道徳の時間においては、それぞれの独自性を生かして指導することによってねらいの達成をめざすであろう。しかし、両者を関連させた指導を行うことで、それぞれの学習活動や内容に対する児童の思いや意図はより一層広がり、深まっていくのではなかろうか。つまり、音楽科において、児童にとって単なる教材の一つであった音や音楽が、道徳の時間との関連によって、「自分とのかかわり」をもったものへと変わる。音や音楽に対する情感や思いは一層強くなり、音楽表現はさらに思いや意図をもったものへと深まるであろう。道徳の時間においては、「自分とのかかわり」をもとに道徳的な価値に触れるだけでなく、音楽科において味わった音や音楽の美しさといった「情緒的なかかわり」からも道徳的な価値に迫り、道徳性を育んでいくであろう。

このように音楽科と道徳の関連によって、「情緒的なかかわり」と「自分とのかかわり」の両方が補完し合い、表現活動や道徳性の育成においても広がりや深まりを生じさせる、という両者の関連による相乗効果が期待できる。

１－３　音楽科から見た道徳との関連

音楽科においては、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てること、豊かな情操を養うことを目標に内包していることから、音楽授業における音楽そのものや音楽活動が、児童にとって実感を伴ったものでありたい。

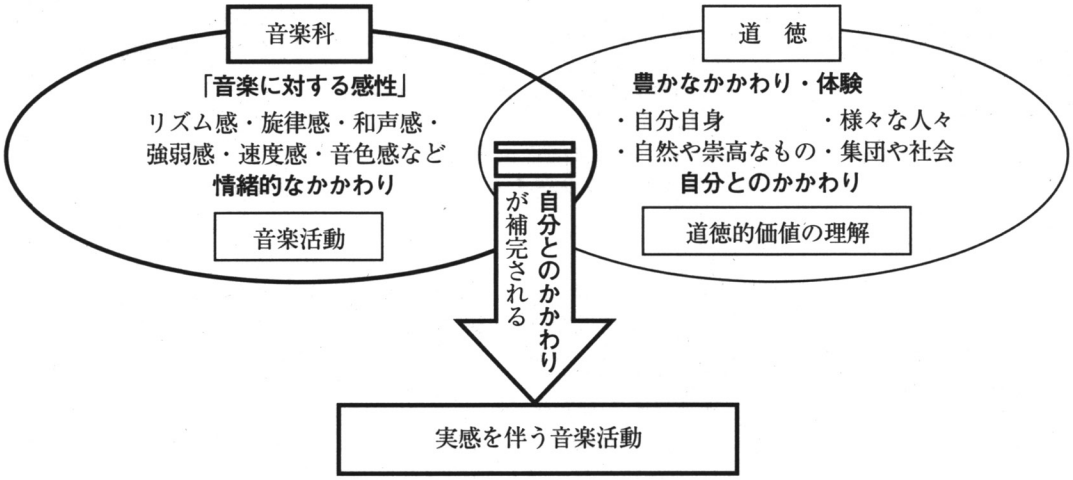
表現や鑑賞の活動においては、リズム感や旋律感、和声感、強弱感、速度感、音色感といった音楽に対する感性を拠りどころとして学習が展開される。これらの音楽に対する感性について、児童は教師の働きかけによって知識として受容的に理解するだけではなく、能動的に感じ取っていくことが求められているのではなかろうか。リズム感であれば手拍子を打ったり指揮をしたり、また旋律感であれば演奏したりふしをつくったりするなど、児童が音楽に対する感性について積極的に働きかけ、五感を通して味わうことにより「情緒的なかかわり」が生じると考える。

音楽そのものや音楽活動が児童にとって実感を伴ったものになるために、さまざまな音楽体験や共感を通して、自分自身にかかわりをもたせることが重要であろう。その際、児童が自身のことに気付いたり見つめ直したり、また自分と音楽とのかかわりを考えたりする場や時間が

必要であろう。自らを見つめ、自らに問いかける場、また、児童の個々の体験だけでなく共通体験を通して考えることのできる場こそ、道徳の時間である。

そこで、音楽そのものや音楽活動に、「情緒的なかかわり」だけでなく「自分とのかかわり」を求め、音楽科と道徳の関連を図っていくべきであろう。

以上の内容を踏まえ、音楽科から見た道徳との関連を［図１］に示す。



［図１］音楽科から見た道徳との関連

ここでは詳しく述べないが、道徳の側から見た音楽科との関連についても触れておく。道徳の時間は、自分自身や様々な人々、自然や崇高なもの、集団や社会といった「自分とのかかわり」をもとに道徳的価値について理解し、道徳的実践につなげていくことをめざす。道徳性の発達には感性や情操の発達も大いに関係することから、道徳の時間は音楽科と関連を図ることで、「自分とのかかわり」とともに「情緒的なかかわり」が補完され、実感を伴った道徳的価値の理解や道徳性の発達がめざされるであろう。

２　事例分析による関連の方法論

ここでは、音楽科と道徳に関連をもたせた実践事例の分析をもとに関連の方法を明らかにしていく。

２－１　事例分析

まず、音楽科と道徳に関連をもたせた実践事例を［表１］に示し、その傾向を明らかにしたい。また、音楽科と道徳という教科等の関連ではないが、道徳の時間にそのねらいとする道徳的価値とかかわりのある歌を歌うなど、音楽科の独自性である「情緒的なかかわり」を生かした音楽活動を取り入れた道徳の実践事例を［表２］に示す。

音楽科と道徳に関連をもたせた実践事例　**［表１］**

	音楽科	関連の意図やねらい	道　徳	関連
事例１	○日本の音楽に親しもう 「春の海」	・道徳の時間の中でねらいとする価値に迫った考え方を教育活動全体に広げる。 ・ァ各教科の内容や教材のもつ道徳的価値を見いだし、子どもに意識付ける。	○花咲く長所 「宮城道雄」	音楽科 ↓ 道徳

事例2	○情景を思い浮かべながら 「エーデルワイス」	・集会でのィ音楽発表に向けて進んで練習に取り組むようになった時期に、約束や正直といった主題について学習することで、勇気を出して進んで行動しようとする心情を育てる。	○自分に正直に 「正直」 ○本当の勇気 「てのひらの中の勇気」	道徳 ↓ 音楽科 ↓ 道徳
事例3	○わたしたちの町の音楽を調べよう 「校区に伝わる『田植え歌』」	・中核となる道徳の時間の事前・事後に位置付けられる他の教育活動を通して、子どもの課題意識を明確にしたり課題を追及したりする。 ・子ども自身の主体的な活動として道徳学習が行われるようにする。	地域の誇りを見つけよう ○不撓不屈 「郷土の農業を発展させよう」 ○創意工夫 「わが町の特産品づくり」 ○郷土愛 「ふるさとの人々―ふるさとへの思い」	道徳 ↓ 音楽科 ↓ 道徳 ↓ 道徳
事例4	○歌詞の読解を深め音楽をより深く理解し、表現しよう 「友達」	・日々の生活、行事、様々な教科の学びを通して、多様な音楽にふれ、その音楽を作り上げている諸要素の働きを感じ取り、理解を深め、自分の好きな音楽を意識できる力を育てる。 ・感じたことや感動したことを言葉や音によって表現する、他に伝えるという自己表現力を培う。	○友だちについて	道徳 ↓ 音楽科
事例5	○自分の思いを音楽で表そう 「私たち地球人、鳴滝発信『環境・命・絆』」	・音楽科固有の教科の内容に対し改めて道徳教育の視点から迫る。 ・道徳の学習と音楽科における鑑賞や音楽づくりを結びつけることで、思いを伝え、思いを受け止めるという豊かな人間形成に関わる学習になる。	共によりよく生きる ○生命尊重 ○郷土愛	道徳 ↓ 音楽科
事例6	「もみじ」	・学習発表会の音楽練習を進める中で生まれた「高齢者にも聞いてほしい」という児童の願いから、単元に音楽科を組み込む。	やさしさの輪を広げよう ○交流のときのことを話そう ○思いやりの心で	道徳 ↓ 音楽科 ↓ 道徳
事例7	○地区文化祭での合唱「みんなのマーチ」	・歌は感性に訴え心に残るものがあるため、歌詞やメロディーから努力していこうという気持ちや、つらいことも乗り越えていこうといい気持ちを抱くことができる。 ・内面に根ざした道徳性を育てる。	○目標に向かって	音楽科 道徳 (順序は示されていない)

※網かけは、音楽科の題材や教材等と道徳の主題や資料に共通点がみられるもの

道徳の授業に音楽活動を取り入れた実践事例　　[表2]

	主題名等	本時のねらい、価値等	本時に取り入れた音楽活動
事例8	生きているのではなく、生かされている	自分が生かされているということの真意や自分を生かす存在について話し合うことを通して、生きていることに感謝し、自他の命を大切にしようとする心情を高める。	・終末に、学習したことを振り返りながら「生きてこそ」を歌う。

事例9	がっこう　たのしいね	友だちと仲よくし、助け合う	・校歌を資料として扱う。 ・展開において校歌を歌い、２番の歌詞の範読を聞く。
事例10	資料「命のアサガオ」	歌詞に込められた生命への思いに共感させる。	・導入と終末に「命のアサガオ」を歌う。

２－２　音楽科と道徳の独自性と関連の種類

ここでは、［表１］・［表２］の事例の中から、事例１、事例２を取り上げて、音楽科と道徳の独自性や関連の種類について論じていきたい。

２－２－１　音楽科と道徳の独自性

音楽科では音や音楽による「情緒的なかかわり」をもつこと、道徳では自分自身と他の人や自然、集団や社会などの「自分とのかかわり」を深めることがそれぞれの独自性と言える。

事例１の音楽科では、日本の音楽に親しもうという題材で、箏の生演奏を聴いたり実際に演奏したりという音楽活動とともに、宮城道雄の生き方にも触れている。児童は箏の演奏から「情緒的なかかわり」をもつことができたであろう。しかし、児童の感想は、宮城道雄が盲目であるという視点からのものが多かったことから、箏の音色や「春の海」の演奏といった音や音楽に心を揺さぶられ「情緒的なかかわり」をもつことよりも、道徳教育が先行していたようにも感じる。

［表１］における項目「関連の意図やねらい」の下線アに見られるように、この音楽科のねらいには、次に学習する道徳的価値への意識付けも含まれる。つまり、音楽科の独自性である「情緒的なかかわり」は弱いと言えよう。

事例２は、道徳性を育む場を総合的に捉え、各教科や特別活動、総合的な学習の時間等の特質を生かして行われる総合単元的な道徳学習である。音楽科における具体的な教材名は明らかではないが、事前の学級活動から、音楽科の内容は集会での発表に向けた「エーデルワイス」の合唱やリコーダー奏と思われる。音楽科では、基礎基本を身につけさせ、音楽科の目標をめざしたであろうが、下線イからも分かるように、音楽科において育まれる心情に期待して道徳と関連させている。期待される「進んで練習に取り組もう」という心情は、「エーデルワイス」の合唱やリコーダー奏から得た「情緒的なかかわり」から生じたものでありたい。

２－２－２　関連の種類

ここでは、音楽科と道徳の関連がどのようなものであるのか、大きく２つにまとめてみたい。

事例１では、［表１］の網かけ部分からも分かるように、音楽科における教材「春の海」の作曲者が、道徳の資料名にある宮城道雄である。このように、音楽科の教材名と道徳の主題名や資料名から明らかな共通点が見られる関連は、「直接的・顕在的な関連」である。

一方事例２では、音楽科の題材名「情景を思いうかべながら」と道徳の主題名や資料名に、共通点はないようである。しかし、総合単元的な道徳学習である事例２は、音楽科のねらいとして曲想にふさわしい表現を工夫することとともに、「協力することの大切さ、仲間と心を合わせる心地よさに気付く」ことを挙げている。道徳や音楽科において育まれる児童の心情に関連をもたせた「間接的・潜在的な関連」である。

２－３　関連の方法論

音楽科と道徳に関連をもたせた事例では、題材や主題、資料内容に共通点が明らかな「直接的・顕在的な関連」が多い。一方、共通点が誰の目にも明らかではないが、音楽科における活

動の中で生じる児童の思いや態度と、道徳におけるねらいや気付かせたい道徳的価値に共通点や連続性をもつ「間接的・潜在的な関連」は［表1］からも少ないことが分かる。

どちらの関連も、前の学習が次の学習への関心を高めたり意欲付けを図ったりしていることは明らかである。また、関連によって、道徳における自分とのかかわりと音楽科における情緒的なかかわりが相互に補完し合うことが可能であり、関連による効果も大きいと言えよう。ただし、「直接的･顕在的な関連」である事例1と「間接的･潜在的な関連」である事例2においては、どちらも、道徳から見た関連による効果は大きいが、音楽科から見た関連の効果は必ずしも大きいとは言えないであろう。

関連に対する教師や児童の意識については、「直接的・顕在的な関連」では、題材や主題、内容などがはっきりと分かりやすく関連しているため、音楽科と道徳の関連を意識しやすい。したがって、次の学習への関心の高まりや意欲付けが図られ、また前の学習との関連付けなども容易に行うことができよう。しかし、このような「直接的・顕在的な関連」が可能な音楽科の題材や道徳の資料が年間を通じてたくさんあるわけではないため、一回性を特徴とした関連になりやすいであろう。

一方、「間接的・潜在的な関連」では、それぞれの題材や主題におけるねらいや、児童の思い、気付きなどのはっきりと表れにくい児童の内面が関連しているため、児童が自ら関連を意識して学習を進めることは難しいであろう。しかし、教師が意図的に関連を仕組むことによって、事例2や事例6のように複数回にわたる関連や循環できる関連を図ることができ、一回性の関連よりもより大きな効果を期待できよう。

これらのことから、音楽科と道徳の関連では、音楽科における「情緒的なかかわり」と道徳における「自分とのかかわり」というそれぞれの独自性を最大限に生かした、「間接的・潜在的な関連」が望ましいと思われる。

おわりに

音楽科と道徳の独自性を生かした関連においては、「情緒的なかかわり」と「自分とのかかわり」が相互に補完し合う。そのことによって、音楽科における音や音楽、音楽活動や道徳における道徳的価値の理解が実感を伴うものになり、「感性」が育成されていくであろう。さらに「感性」の育成は、音楽科の最終的な目標である豊かな情操を養うことや道徳教育の意義である道徳性の育成に向かうのである。

本論文では、音楽科と道徳の独自性を生かした関連により、児童の内面や感性への働きかけが強くなり、互いに効果を高め合うことができるという結論を導き出すことができた。今後は、音楽科と道徳の独自性を生かした関連が、児童の「感性」の育成により有効なものとなるよう、関連の方法論だけでなく児童の心理的側面にも目を向けていきたい。

引用・参考文献

・押谷由夫編（2009）『新教育課程の授業戦略No.4各教科で行う道徳的指導』教育開発研究所
・辻由美子(2007)「第４学年１組　総合単元的な道徳学習指導案　総合単元名『勇気を出して』」『平成18・19年度文部科学省委嘱　児童生徒の心に響く道徳教育推進事業研究発表会』唐津市立湊小学校http://www2.saga-ed.jp/school/edq12514/
・福永由紀（2009）「子どもの道徳的実践力の育成―道徳の時間と各教科とが連関（つながり・かかわり）した道徳教育の指導法の探究を通して―」『平成21年度研究紀要（第827号）』福

岡市教育センター道徳研究室http://www.fuku-c.ed.jp/center/houkokusyo/h21/index.htm
・『道徳教育』No.607、No.610　明治図書
・文部科学省（2008［平成20］）『小学校学習指導要領』東京書籍
・文部科学省（2008［平成20］）『小学校学習指導要領解説　音楽編』教育芸術社
・文部科学省（2008［平成20］）『小学校学習指導要領解説　道徳編』東洋館出版社